

私の人生航路

愛知県 豊内政弘

私、大正十二年三月二十三日、満州吉林省長春、南満州鉄道附屬地入船街二丁目九番地の四で出生した者です。両親は、大正五年頃より右の住所に居住してゐた。職業は建築請負業です。

父の開拓請負を横に見て、私は子ども時代を、支那人の子ども達と遊んでいた。私は大人の日本人から、支那人の子どもとよく間違われたそうです。その頃が私にとっても毎日が充実した、平和な日であったと思つてゐます。その後満州国皇帝が誕生し、都市の名称が、新京特別市と変りました。

私も混成学校（日本人、支那人、朝鮮人が共学）に通学していましたが、突然に思いがけない出来事が発生したのです。昭和十一年九月九日、父が病に倒れ、四十二歳の男の大厄に勝てず、他界したのです。これ

から一家四人、不幸にも奈落に転落、建築請負組は、解散、負債に追われ、家も売り払つて負債の担保にとられるはめになり、これから一家四人の借家住まいの生活が始まり、家計が一変したのです。一本の大きな柱がなくなったら、こんなに違うものかと子ども心にも今までの生活を心より感謝した。翌日より母は働きに出て、私と妹は通学です。

そのうち、私は昭和十二年三月に、満州国新京特別市白菊尋常高等小学校を卒業、私もいろいろな職業を経て、昭和十五年七月十日、南満州鉄道株式会社に入社して、居住も、新京特別市菊水町の満鉄社宅に入居して一家団らんの生活を送ってゐました。私の満鉄在社中、瀧溝橋事件があり、ソ満国境でのノモンハン事件あり、勤務も戦時体制になり、日夜戦車、トラック、大砲、その他の武器の輸送に従事して、毎日多忙な日を過ごしてゐました。お蔭で陸軍大臣より感謝状並びに記念に大きな額を戴き、床の間に飾つて日本の戦勝を祈り夢見ていたのです。

その後、日ソ不可侵条約の締結を見、日ソ間の安定

を見たようです。私の姉も嫁に行っていたのですが、従兄弟が召集を受けて北支に入隊しました。昭和十六年十二月八日、いよいよ大東亜戦争突入、戦局は拡大の一途をたどったのです。

私も昭和十八年七月入隊がきまり、入隊前夜親子四人、ささやかな別れの会食でした。これが親子の最後の別れになるうかと、一人汽車の中で思いをはせながら、社宅前で見送ってくれた妹、みんなの顔が走馬灯のように浮かびました。

汽車は目的地の東満総省鶏寧県適道駅に停車、ほとんどの客が下車、なんだみんな同志だったのかと勇気が出た。ただちに歩兵第十四連隊に入隊。基本教育の末、軍隊生活に入る。

零下三十度、四十度のソ満国境地帯の陣地構築、匪賊討伐、又は冬期演習と、寒さをついて軍務に精励していましたが、昭和十九年頃より、南方の戦局が不利にともない、第三大隊主力をサイパン方面へ移動。昭和二十年二月、連隊は本土決戦部隊として、急きょ九州へ移動命令。真夜中前一時に第十四連隊は適道を

ひそかに撤収、汽車で南下した。朝鮮半島を通過、釜山港に着く。

各分隊徹夜での交替作業で、武器、トラック、大砲、戦車、食糧その他の物品を船積み、一万トン輸送船に連隊全員収容したのには、おどろきです。出航、九州博多港着、全部の荷下しに、一週間徹夜での作業終了、全員の乗車を得て、宮崎県地方へ出発、宮崎県高原を中心にした一帯に集結、連隊名を、秘匿名国第四九〇三部隊と称す。南部決戦の重点地高鍋地区に決戦陣地を構築、敵の上陸にそなえたが。

昭和二十年八月十五日思いもかけず、終戦の詔勅の放送あり、誰もがこれから、どうなるのかと、戦々恐々の思いだったと思います。恐怖と不安の本土進駐がやってくるのだ。昭和二十年九月二日、東京湾上に浮かぶ米戦艦ミズリー号上にて降伏調印によって正式に日本占領の幕が開いた。

私も除隊して行くあてもなく、着のみ、着のまま、なんとかなると思うて、本籍地の熊本県に帰り、親兄弟が帰ってくるであろうと、思いながら親類の農業を

手伝っていたが、みなさんご存じの食糧不足だ。親類もいい顔をしない、なさけない思いであった。

人間どこに落ちた時こそ、その持つ心が、よくあらわれるものだ。その頃、誰からか炭鉱が景気が好いが行ってみないかと云われ、思いきって炭鉱の中心地、福岡県に移住、幸いにも三井山野炭鉱に就職、家族が引揚げてくるまで寮に入り、家族の引揚げを待った。

その内、炭鉱生活にもなれて、もっと早くきていればよかったと反省していた。終戦より二年目に母が姉の子どもをつれて引揚げてきた。姉妹は、引揚げの途中で死亡、姉に代って、幼い子どもを、苦勞して一緒に引揚げるのがいかに大変であったか、母の引揚げ時の話を聴くにつれ、遠い所から大変であつたろうと感謝している。

何より平和

滋賀県 中川 静恵

昭和二十年三月十九日、夫に召集令状がきて、夫とゆつくり話すこともできないまま出発の時間がきてしまったような記憶が残っています。

その後、つぎつぎと健康な男子は応召されてゆき、八月九日ソ連参戦、大和区の中心街の住民は疎開することになり大石橋の同系会社、社宅に割当られたところに着きました。玄関で八月十五日の終戦の詔勅が放送されている時でした。それで、予定が変わり、会社の倉庫に奉天に帰宅出来る日まで共同生活です。雨季でもないのに、毎日強く降り続けました。「礎となった霊の涙だ」とも言いあいました。ようやく二か月過ぎに帰宅しました。

女、子供は一步も外出出来ず、窓ガラスを破られないよう板を張り、男子の方々がお世話して下さるので